

『日本霊異記』 上巻冒頭説話の存在意義と役割について

—日本固有信仰と仏教の関係—

The Purpose Behind the “Nihon Ryoiki” Part 1: Japanese Unique Faith and Buddhism

東海林 克也
SHOJI Katsuya

1. はじめに

神仏習合思想を研究するにあたって、当時の一般民衆の思想を表している『日本国現報善悪霊異記』（以下『日本霊異記』と略記する⁽¹⁾）は重要な史料となる。したがって、この『日本霊異記』を考察していくことが神仏習合の現象を理解することにつながると思う。つまり、本論は神仏習合思想を研究するにあたり、その前段階としての『日本霊異記』の小考と位置づける。

さて、そこで問題となっているのが『日本霊異記』上巻冒頭話の存在である。

『日本霊異記』は奈良時代から平安時代初頭に編纂された日本最古の仏教説話集である。そこには、仏教思想を中心に、地方の古代民間説話を集めた上中下の三巻構成で全 116 話が収められており、民衆の様々な生活様式が描かれて、当時の社会状況や古代思想を理解する文献となる。

しかしその上巻冒頭説話の既存研究では非仏教説話とされている。『日本霊異記』は仏教を流布するために編纂され、その対象者は一般民衆であった。しかしなぜ非仏教説話が入っているのか。そこで仏教説話集である『日本霊異記』の中で非仏教説話とされる上巻冒頭説話にどのような意義・役割があったのかを見て行く。

2. 先行研究

『日本霊異記』上巻冒頭説話に関しては多くの研究論文があるが、その中でも日本固有の神の権威・地位に関する研究について、以下が主なものである。

まず、久保田実氏は巻冒頭説話には、固有信仰の代表的存在である、雷神の衰退を描かれていると解釈し、「上巻第一縁が仏教説話集の中の非仏教説話である。」と明言している。さらに、『古事記』『日本書紀』と比較しながら、上巻第一縁の解釈として「説話集の神的なものによる意味づけと、新しい信仰の前提として神の没落を意味するのである。」と論じている⁽²⁾。

次に、小泉道氏は上巻一縁と人間が自然を制圧してきた過程を物語る類話を比較し、

「固有の呪的信仰の世界において死後の行為が暗示される伝承は、仏教信仰の世界における応報ないし転生譚を説く前座として、まさに恰好のものであろう。景戒もそういう意味をこれに持たせたのではなからうか。」と論じている。そこから、『日本霊異記』全体の構成の中から「景戒は上一～五縁において、固有呪術的世界に根ざしながら仏教世界への導入を一応完結させるべく構想づけた」と論じた⁽³⁾。

また、寺川真知夫氏は「非仏教説話でも、説教では仏教的意義を担わせ得ると判断していた」と考察し「本縁は仏の靈威や功德を説く話ではなかったが、仏教を信じず、固有信仰を保つ人々が崇拝する固有神の代表的存在、雷神の衰微を説く。その内容は仏菩薩やその眷属神の信仰と功德を信じるよう勧める立場からすると好都合なものであった。また、景戒にも固有神の衰微を説く意図のあったことは、他の説話との関連でみると、十分考ええることであった。」と論じている⁽⁴⁾。

さらに、青木未幸氏は「前段は神の權威を守った話。後段は雷神が聖域に墓を作られたこと（聖域に対しての怒り）に対して怒り、報復にでる。しかし失敗して捉えられる結果になり神の衰微を描いた。」と考察した⁽⁵⁾。

それから、永田典子氏は『日本霊異記』の編纂を景戒の信仰と教化のフィルターを通してという前提のもと「仏教的色彩のない説話にもそれなりの意義がある」とし「本縁は小子部氏の氏族伝承である」と論じている⁽⁶⁾。

また、義江明子氏は上巻1話を『日本霊異記』全体の構想からとらえて「上巻第1話は、雄略朝のこととして語られてきた伝承に推古の時代を重ねて、「雷神を捉えた話」として描き、王権と仏教の歴史の始まりとしての明確な位置付けを示している」と論じている⁽⁷⁾。

そして、藪敏晴氏は序文に示されている仏法と説話配列によって読み取れる仏教史叙述の2側面から考察し「上一は因果の理こそを仏法として認識する『霊異記』にあって、その例証として機能する」と述べ仏教史を叙述する『霊異記』の中で歴史叙述に神話的枠組みを与えていると論じている⁽⁸⁾。

最後に、守屋俊彦氏は上巻1話について「仏教と神道の対立という視点が最も可能性がある」とし「因果応報という異国の思想に引き入れるための準備手段、いわば誘導路としての役割を果たしている」と論じている⁽⁹⁾。

したがって、これら上巻冒頭説話の神の權威・地位に関する研究の特徴は以下の5点に分類される。

- ① 仏教説話への導入
- ② 神（固有信仰、雷神）の衰退
- ③ 氏族伝承
- ④ 王権・仏教史の始まり
- ⑤ 仏教説話に神話的枠組みの追加

以上のように様々な学説が存在する。しかしそのどれもが定説には至っていないのが現状である。

このような先行研究がある中で、守屋俊彦・寺川真知夫氏の研究を概観しつつ「神祇信仰の相対的低下、仏教説話集への導入話」という視点に基づき上巻冒頭説話についての再考察を行っていく。

3. 当時の社会状況と古代思想

上巻冒頭説話を考察する前に『日本霊異記』が編纂された当時の社会状況を見てみよう。

当時の社会状況をよく表しているのは『万葉集』⁽¹⁰⁾に収められている山上憶良の「貧窮問答歌」であろう。本論文では改めて「貧窮問答歌」を提示しないが、内容から当時の農民が極めて過酷な生活環境にあったことは容易に想像できよう。

では次に農民にとって重要な当時の土地制度の変遷についても確認していく。

土地制度における重要な分岐点となっているのが、まず645年の公地公民制であろう。土地の公民化は古代律令国家体制の要となる重要な政策であった。当時は私有地であった土地が国のものとなり租税の義務が発生し国民の生活が大きく変化していった。

次いで、701年には班田収受法が本格成立し農地の支給・収容に関する重大な法体系が整っていった。しかし租税の重い負担などにより逃亡する農民が続出し次第に形骸化していくことになる。

土地制度が形骸化すると、朝廷・貴族の中央官僚と地方豪族・一般民衆の生活格差は縮まるどころか拡大するばかりで貧困の一途をたどるものであった。労役として諸国に派遣されていた人々は、労働の厳しさから逃げ出す者もいたほどであった。労役の義務が終わり、自国へ帰ろうにも食料が確保できずにいたところで餓死するという出来事も日常であった。その後723年には三世一身法が発布される。さらに続いて班田永年私財法が行われるが田は不足し、重税から逃れるために浮浪者が続出した。公地公民制が制度化されてからわずか100年前後で土地制度の崩壊、さらに律令制が崩壊し社会は完全に疲弊している状態であった。

このような過酷な身分社会制度や税の取り立てから逃げた民衆についても『続日本紀』⁽¹¹⁾のなかに見ることができる。また逃げた農民は浮浪者となる者も多かったとされる。それは『続日本紀』など史書の記事にされるようなほど大きな問題であった。

つまり、農民は律令体制のもと、公民として国家に把握・管理されており、その税は過酷であり、人として最低限の活動である生きること自体が脅かされる社会であったと推測できる。

次に当時の自然環境についても確認する。

古代当時においても自然災害や飢饉、飢餓が多発しており『続日本紀』に記載されている。自然災害による人的被害、精神的被害、住居環境の被害は甚大であったように思われる。古代において人間が生きる世界では人間だけではどうすることもできない事態が多くあったと推測できる。このような社会経済状況の中で一般民衆や地方有力豪族が金銭面でも精神面でも疲弊していた事は明白であろう。

当時の古代人はこのような人知を超えた力に対して畏怖の念・畏敬の念を抱き、自然を「カミ」として信仰していた。人の力が届かない現象に対して全て世の定めと受け入れていたという事は想像に難しくない。

この全てを受け入れるという考えは「自然（しぜん）」を当時「自然（じねん）」や

「おのずから」と表現していた思想に現われている。しかし、このような苛酷な社会状況、生活環境の中で「おのずから」では全てをしぜんのあるがまま受け入れることができなくなってしまった。その中で仏教の流布・因果応報の理を民衆に教え広めるために『日本霊異記』が編纂されたのであるということをしかりと理解しておかなければならない。

4. 『日本霊異記』編纂意図の確認

先述したように朝廷や上流貴族以外は現在では想像できない過酷な環境の中で生活を営んでいた。このような苛酷な社会環境を背景として、「おのずから」では全てを受け入れられなくなってしまったという状況がある。そこで「おのずから」ではない新しい思想（仏教）を流布するために『日本霊異記』が編纂されることとなる。それでは、編者景戒がどのような意味・願をこめて編纂していったのか見ていく。

まず、改めて題目をみると、その正式書名は『日本国現報善悪霊異記』である。これはその題目通り日本国における善行・悪行はすべてが良い報い・悪い報いとして表れるという意味である。

次に、上中下各巻の序文の編纂意図や景戒の意識がうかがえる個所を抜粋する。
まず上巻序文である。

- ① 愚痴の類は迷執を懐き、罪福を信なりとせず。深智の儔は内外を覩て、信として因果を恐る。
- ② 是に諾楽の薬師寺の沙門景戒、熟世の人を瞰るに、才好くして鄙なる行あり。利養を翹て、財物を貧ること、磁石の鉄山を挙して鉄を嘘フヨリモ過ぎたり。他の分の欲ひ己が物を惜しむこと、流頭の粟の粒ヲ碎キて、以て糠を啖ムヨリモ甚だし。或は寺の物を貪り、犢に生まれて債を償ふ。或いは法僧を誹りて現身に災を被る。或いは道を殉め行を積みて、現に験を得たり。或いは深く信じて善を修め、以て生きながら祐に霑ふ。善悪の報いは、影の形に随ふが如し。苦楽の響ハ、谷の音に応ふるが如し。見聞きする者は、甫ち驚き怪しび、一卓の内を忘る。慚愧する者は、倏に悸キシ惕み、起ち避る頃を忿ぐ。善悪の状を呈すにあらずは、何を以てか、曲執を直して是非を定めむ。因果の報を示すにあらずは、何に由りてか、悪心を改めて善道を修めむ。
- ③ 何ぞ、唯し他国の伝録をのみ慎みて、自土の奇事を信じ恐りざらむや。粵二起ちて自ら矚るに、忍び寝ムコト得ず。居て心に思ふに、默然ルコト能はず。故に聊かに側二聞けることを注し、号けて日本国現報善悪霊異記と曰う。上・中・下の参巻と作し、以って季の葉に流ふ。
- ④ 祈ハクハ奇記を覽む者、邪を退けて正に入れ。諸悪莫作、諸善奉行。

次に中巻序文である。

- ⑤ 悪因は轡ヲ連ねて苦しき処に趨る。善業縁に攀ヂテ安き堺を引く。

- ⑥ 庶はくは拾文を觀む者、天に愧ぢ人に慙ぢ、忍びて事を忘れ、心の師と作して、心を師とすること莫れ。
- ⑦ 仏性の頂に登り、普く群生に施し、共に仏道を成ぜむ。

最後に下巻序文である。

- ⑧ 世を觀るに、善を修する者は、石の峯の花の若し。悪を作す者は、土の山の毛に似たり。
- ⑨ 既に末劫に入りぬ。何ぞ仵めざらむ。喃レ汎く言憫む。那か劫災を免れむ。
- ⑩ 記ゆること無くして罪を作せば、記ゆること無くして怨を報ゆ。何に況や悪心を発して殺さむときに、彼の怨報無きことあらむや。悪を殖うる因と、怨悪の巢とは、是れ吾が迷へる心なり。福因を作して、菩提を鑿るは、是れ我が寤れる懐なり。
- ⑪ 奇異しき事を注して、言提フル流に示す。手を授けて勧めむと欲ひ、足を濡ギテ導かむことを欲ふ。庶はくは、地を掃ひて共に西方の極樂に生れむ。

というように、景戒は各巻序文に述べている。

このような序文を読んでいくと、なぜ景戒が『日本靈異記』を編纂するに至った経緯が当時の世界観から理解することができるのではないだろうか。

要約すると、当時の世の中は末法の世界で、多くの人々は自分の欲求のままに生きており、後世や現世において悪行の報いを得ている。善行をしている人は善の報いを得て幸福に生活している。しかし、悪行をしている人は雑草のように多くいて、善行を行っている人は極めて少ない。しかも他国の不思議な話は信じるのになぜ日本の不思議な話は信じない世の中であり、景戒は憂い嘆いていたと受け取ることができる。そこで景戒は日本の不思議な話を聞き集め因果応報の具体的な事例を各話に示しながら善行を勧め、悪人・悪行を行っている人を救い導こうという目的から編纂したのである。中田祝夫氏は各巻序文を通して「中国の仏教説話集にならって日本の奇事を集めた。これによって人々に善因善果、悪因悪果の応報のすみやかなることを知らせ、現世の行動の規範としたい」⁽¹²⁾と編纂意識を読み取っている。『日本靈異記』全体の説話を通して中田氏は「各説話にも人間救済の具にしようとする意図がはっきりと感じ取れる」⁽¹³⁾と述べている。

それでは、景戒はどのような人々を仏教の道へ導こうとしていたのか。景戒がこの『日本靈異記』を誰に対して読み聞かせようとしていたかについて宇佐美正利氏は「景戒が対象として考えた相手は僧侶ではなく、あくまでも俗人であったのである。それゆえ俗人でも簡単に理解できる現象でもって善悪の報いを示し、因果応報の理を説明した」⁽¹⁴⁾と論じている。つまり、地方豪族や一般民衆を対象としていたと考えられる。

また、『日本靈異記』の因果応報説話は一般民衆に仏教を教化するにはうってつけの題材であった。一般庶民層に対して仏教の因果応報の理、善悪応報を説くためには現世利益を訴えるのが極めて効率的であったからである。

それでは、その『日本靈異記』の上巻冒頭説話はどのような意味を持つのか検討し

ていく。

5. 『日本霊異記』 上巻冒頭説話の意義とは

『日本霊異記』では、上中下各序文で執拗なまでに「因果応報」を繰り返し説き、民衆を仏教の道へ導こうとしている。しかし、因果応報によって仏教で説くところの極楽浄土へ導くためには仏教の優位性を説き、土着的神祇信仰の相対的低下を表現しなければならないのではなかろうか。

景戒は仏教者であり『日本霊異記』の編纂意図からも分かるように仏教の民衆への強化が目的である。そこで1つの問題となるのが上巻冒頭説話の存在である。上巻冒頭説話は仏教説話集である『日本霊異記』の中で仏教臭さがあまり感じられず非仏教説話と考えられている。そのため解釈に関する研究もなかなか進展しないのが現状である。

前述した先行研究のまとめにて、先学者がさまざまな研究を行っており多くの研究学説が存在する。しかし定説とまでは至っていないのが現状である。

そこで改めて上巻冒頭説話に関してその存在意義について考察していく⁽¹⁵⁾。

まず考察するにあたって冒頭説話全文を提示する。

雷を捉えし縁 第1

少子部の栖軽は、泊瀬の朝倉の宮に、二十三年天の下治めたまひし雄略天皇の隨身にして、肺脯の侍者なりき。天皇、盤余の宮に住みたまひし時に、天皇、后と大安殿に寐テ婚合したまへる時に、栖軽知らずして参り入りき。天皇恥ぢて輟ミス。

時に当たりて空に電鳴りき。即ち天皇、栖軽に勅して詔はく、「汝、鳴雷を請け奉らむや」とのたまふ。答えて白さく、「請けまつらむ。」とまうす。天皇詔言はく、「爾らば汝設け奉れ」とのたまふ。栖軽勅を奉りて宮より罷り出ず。緋の縷を額に着け、赤き幡竿を撃ゲテ、馬に乗り、阿倍の山田の前の道と豊浦寺の前の路とより走り往きぬ。軽の諸越しの衢に至り、叫囂びて設けて言うさく、「天の鳴電神、天皇設け呼び奉る云々」とまうす。然して此より馬を還して走りて言さく、「電神と雖も、何の故にか天皇の請けを聞かざらむ」とまうす。走り還る時に、豊浦寺と飯岡との間に、鳴電落ちて在り。栖軽見て神司を呼び、匣籠に入れて大宮に持ち向ひ天皇に奏して言さく、「電神を設け奉れり」とまうす。時に電、光を放ち明り炫ケリ。天皇見て恐り、偉シク幣帛を進り、落ちし処に返さしめたまひきと者へり。今に電岡と呼ぶ。

然る後時に、栖軽卒せぬ。天皇勅して七日七夜留めたまひ、彼が忠臣を詠ひ、電の落ちし同じ処に彼の墓を作りたまひき。永く碑文の柱を立てて言はく、「電を取りし栖軽が墓なり」といへり。此の電、悪み恨みて鳴り落ち、碑文の柱を踊エ踐み、彼の柱の析けし間に、電撲リテ捕へらゆ。天皇、聞こして電を放ちしに死なず。電慌レテ七日七夜留りて在り。天皇の勅使、碑文の柱を樹てて言はく、「生きても、死にても電を捕れる碑文が墓なり」といひき。所謂古時、名づけて電の

岡と為ふ語の本、是なり。

まずこの上巻冒頭説話は前半後半の2部構成となっている。前半部分は冒頭少子部の栖軽は（中略）今に電岡と呼ぶ。までである（以下前半部Aと呼ぶ）後半部分は然る後時に（中略）是なり。である（以下後半部Bと呼ぶ）

簡単に話の流れを説明すると前半部Aは天皇と皇后が大安殿において共に寝ているところを栖軽に見られてしまい、天皇が栖軽に「雷を捕まえてこい」と勅命を出して雷を捉え、捉えた場所を雷の岡と呼ぶ。と言う話である。後半部Bは栖軽が死に「雷の岡」に栖軽の墓が建てられた。その墓に栖軽を恨んでいた雷が落ちるが、墓の柱の裂け目に挟まってしまい再び捉まってしまう。その後「生きても死んでも雷を捕える栖軽の墓」という柱が建てられた。と言う話である。

さてここで問題になるのが、話の中心は何なのかということである。

「小子部栖軽は、泊瀬の朝倉の宮に、二十三年天の下を治めたまひし雄略天皇の隨身にして肺脯の侍者」であって「天皇、盤余の宮にみたまひしときに、天皇、后と大安殿に寝て婚合したまへる時」であっても「栖軽知らずして参り入りき。」というほどの天皇の信頼が厚かった栖軽の功績譚⁽¹⁶⁾ や景戒の祖先譚（氏族譚）⁽¹⁷⁾ という研究もある。また、栖軽をして「電神と雖も、何の故にか天皇の設けを聞かざらむや」といわしめるほど天皇の権威が絶対的なものであったという考えもできる。つまり中心人物は「電神をつかまえた」栖軽なのか、「電神をつかまえて来い」と命じた天皇なのか、または、捕まえられた雷なのかということである。これは表題の「雷を捉えし縁」と示す通り素直に解釈すると「雷を捕えた」栖軽が主人公と考えられる。

ところで、上巻冒頭説話前半部Aと似た話が『日本書紀』⁽¹⁸⁾ に異文として記されている。上巻冒頭説話との雷神の比較として検討するため全文を示す。

『日本書紀』卷14 雄略天皇7年7月条

七年の秋7月の甲戌の朔にして丙子に天皇、少子部連螺羸に詔して曰く、「朕、三諸岳の神の形を見むと欲ふ。或いは云はく、此の山の神、大物主神とすといふ。或いは云はく菟田の墨坂神なりといふ。汝、膂力人に過ぎたり。自ら行きて捉て來」とのたまふ。螺羸答へて曰さく、「試に住りて捉へむ」とまをす。乃ち三諸岳に登り、大蛇を提取へて、天皇に示せ奉る。天皇、齋戒したまはず。其の雷虺虺きて、目精赫赫く。天皇、畏み、目を蔽ひて見たまはず、殿中に却き入り、岳に放たしめたまふ。仍りて改めて名を賜ひて雷とす。

内容としては天皇が三諸岳の神を捕まえてこいと少子部連螺羸に言い、三諸岳の神である大蛇を捕まえた。しかし大蛇が怒ったため、天皇は恐れ、大蛇を解き放ち改めて大蛇に名前を与え雷となった。という話である。この話は『日本霊異記』冒頭説話前半部Aと非常によく似た話となっており、『日本霊異記』上巻冒頭部と『日本書紀』の話では卷14 雄略天皇7年7月条は両方とも「雷神」を捉えた話である。特に『日本書紀』の話では三諸岳の神=大蛇=雷神として表現されており、古代の蛇=雷神の関係を表していると考えられる。

つまり『日本書紀』の大蛇（雷神ともいえる）は1度捉まってしまうのだが、天皇が恐れをなし解き放ってしまうという理解ができよう。この「大蛇（雷神）を恐れた」と言うのが1つのポイントとなっているのではなからうか。『日本書紀』では神を恐れたのに対し『日本霊異記』の方ではどうだろうか。雷神は少子部栖軽に捕まえられ、その死後も捉えられてしまう。このような表現で雷神を恐れていたとは言えないであろう。

本来、農耕とかかわりのある雷（水の神）を祀ることが古代の絶対的常識であった。

冒頭説話の異文とされている『日本書紀』では神を恐れている。しかし冒頭部前半Aでは天皇の勅命で少子部栖軽なる人物に捉えられてしまう。本来であれば祀られなければならない雷神にもかかわらずである。冒頭部後半Bにおいても雷神は墓の柱に落ちて捉まるという大失態を犯している。この『日本書紀』と『日本霊異記』の比較から見えることは日本書紀（神話的の神）から日本霊異記（仏教説話）へという神の変容であったのではなからうか。

冒頭説話前半部Aを『日本書紀』と似せながらも雷神を恐れる話から雷神を捉える話へと変化させ、後半部Bでさらに雷神が捉えられる話を付け足し神の権威を相対的に低下させているのではないだろうか。つまり前半部Aは『日本書紀』とにせた仏教（仏教説話）への導入とし、さらに後半部Bで雷神が捉えられる話（神祇の低下）を表現していると考えられるのではなからうか。

6. まとめ

本論文では『日本霊異記』上巻冒頭説話の存在意義を考察してきた。

まず『日本霊異記』が編纂された時代・社会背景は第3章で述べたとおり、『万葉集』や『続日本紀』などによると、重税や自然災害の多発などに苦しめられ当時の地方豪族、一般民衆は非常に過酷な状況で生活を営んでいた。

このような背景で「因果応報の理」を一般民衆に説き、民衆を仏教の世界、極楽浄土の世界に導こうとするために編纂したことを第4章で確認した。そこで問題になっていたのが上巻冒頭説話である。なぜ仏教説話集の中に非仏教説話が存在するのか、その意義が1つの問題であった。

そこで本論では、「神祇信仰の相対的低下、仏教説話集への導入話」という視点に基づき読み解いた。その結果、上巻冒頭説話は『日本書紀』と似せながら仏教説話の導入的な役割を果たし、仏教全体の優位性を示すために相対的に神の力の相対的低下（神祇の低下）を表現していると考察した。『日本霊異記』の因果応報説話は一般民衆に仏教を教化するにはうってつけの題材であった。一般庶民層に対して仏教の因果応報の理、善悪応報を説くためには現世利益を訴えるのが極めて効率的であった。当時の日本思想に対し緒方惟精氏は古事記、祝詞、万葉集を考察し「日本固有思想には「来世観」は認められない」⁽¹⁹⁾と述べている。当時の日本思想に来世観が見られないのは、先に述べたように物事の全てを受け入れるという「おのずから」という思想が関係あったのではなからうか。当時の思想に来世観がなく良いことも悪いこともおのずからの

ままだに生きている人びとにとって良いことも悪いこともおのずからそのまま全てを受け入れて生活を営んでいる人びとにとって、過酷な社会環境や社会不安の中ではおのずからというありのままを受け入れることは非常に困難となっていた。このような民衆の人々にとっては因果応報、現世利益の考えは極めて解りやすかったのではないかと想像できる。おのずからという古代思想から因果応報という仏教思想へと変化させるためには当時の共同体がもっていた神祇的信仰から仏教思想を信仰するための変化があったのではないだろうか。

■註

- (1) 中田祝夫、1995、新編日本古典文学全集 10『日本霊異記』小学館、以下『日本霊異記』の本文は全てこれによる。
- (2) 久保田実、1974、「仏教説話集における神の説話の意義」『駒澤國文』11 卷
- (3) 小泉道、1974（昭和 49）、「雷岡の墓標」『國語國文』第 43 卷第 6 号（478 号）、中央図書出版社
- (4) 寺川眞知夫、1996（平成 8）、『日本国現報善悪霊異記の研究』和泉書院
- (5) 青木美幸、2001、「『日本霊異記』と神の衰微」武庫川女子大学大学院雑誌『かほよとり』第 9 号
- (6) 永田典子、1981（昭和 56）、「小子部柄軽説話考」甲南女子大学大学院『論叢』第 2 号
- (7) 義江明子、2003、「雷神を捉えた話と推古天皇」大隅和雄編、『文化史の諸相』吉川弘文館
- (8) 藪敏晴、1995（平成 7）、「『日本霊異記』の仏法と歴史叙述」『説話文学研究』第 30 号
- (9) 守屋俊彦、1978（昭和 53）、『続日本霊異記の研究』三弥井書店
- (10) 小島憲之・木下正俊・東野治之校注訳、1994、新編日本古典文学全集 7『万葉集』小学館
- (11) 宇治谷孟、1992、『続日本紀（上）』全現代語訳、講談社
- (12) 中田祝夫、1995、新編日本古典文学全集 10『日本霊異記』小学館
- (13) 中田祝夫、1995、新編日本古典文学全集 10『日本霊異記』小学館
- (14) 宇佐美正利、1995、『日本霊異記とその時代』おうふう
- (15) 従来上巻冒頭説話の研究については、本論文で取り上げている冒頭話の存在意義以外にも多くの問題点がしている。1 点目は天皇と皇后が寝ていた大安殿の性格。2 点目は天皇と皇后が共に寝ていたという意味。3 点目は天皇と皇后が共に寝ていた時に鳴った雷の意味。4 点目は上巻冒頭説話と道場法師系説話の関係などである。上記 4 点についても冒頭話を研究するには合わせて考察しなければならないが、本論文では割愛し今後研究していく。
- (16) 山根対助、1961（昭和 36）、「道場法師系説話の位置」『國語國文研究』第 18・19 号
- (17) 柳田國男、1976（昭和 51）、「若宮部と雷神」日本文学研究資料叢書『説話文学』有精堂出版
- (18) 小島憲之・直木孝次郎・西宮一民・蔵中進・毛利正守校注訳、1996、新編日本古典文学全集 3『日本書紀』2 卷、小学館
- (19) 緒方惟精、1964、「日本霊異記の制作態度」千葉大学文理学部『文化科学紀要』第 5 号

■参考文献

- 青木美幸、2001、「『日本霊異記』と神の衰微」武庫川女子大学大学院雑誌『かほよとり』第 9 号
 出雲路修校注、1996、新日本古典文学大系 30『日本霊異記』岩波書店
 今成元昭、1978（昭和 53）、「NHK ブックス 307『仏教文学の世界』日本放送出版協会
 宇佐美正利、1995、『日本霊異記とその時代』おうふう
 宇治谷孟、1992、『続日本紀（上）』全現代語訳、講談社
 緒方惟精、1964、「日本霊異記の制作態度」千葉大学文理学部『文化科学紀要』第 5 号

- 久保田実、1974、「仏教説話集における神の説話の意義」『駒澤國文』11巻
- 小泉道、1974（昭和49）、「雷岡の墓標」『國語國文』第43巻第6号（478号）、中央図書出版社
- 小島憲之・木下正俊・東野治之校注訳、1994、新編日本古典文学全集7『万葉集』小学館
- 小島憲之・直木孝次郎・西宮一民・蔵中進・毛利正守校注訳、1996、新編日本古典文学全集3『日本書紀』2巻、小学館
- 岸正尚、1985、「『日本靈異記』上巻の構想」『並木の里』第26号『並木の里』の会
- 東海林克也、2015、「日本における自然についての小考」『21世紀社会デザイン研究』第13号、
立教大学大学院21世紀社会デザイン研究科
- 寺川眞知夫、1996（平成8）、『日本国現報善悪靈異記の研究』和泉書院
- 中田祝夫、1995、新編日本古典文学全集10『日本靈異記』小学館
- 永田典子、1981（昭和56）、「小子部栖輕説話考」甲南女子大学大学院『論叢』第2号
- 原田敏明・高橋貢訳、1985、『日本靈異記』平凡社
- 前島康佑、2012、「『日本靈異記』と神祇信仰の衰退について」『東京大学宗教学年報』30号
- 森正人、1995（平成7）、「童形の雷神—道場法師とその末裔たち—」『説話文学研究』第30号
- 森正人、2014（平成26）、『古代説話集の生成』笠間書院
- 守屋俊彦、1978（昭和53）、『続日本靈異記の研究』三弥井書店
- 柳田國男、1976（昭和51）、「若宮部と雷神」日本文学研究資料叢書『説話文学』有精堂出版
- 藪敏晴、1995（平成7）、「『日本靈異記』の仏法と歴史叙述」『説話文学研究』第30号
- 山根対助、1961（昭和36）、「道場法師系説話の位置」『國語國文研究』第18・19号
- 義江明子、2003、「雷神を捉えた話と推古天皇」大隅和雄編『文化史の諸相』吉川弘文館
- 吉田一彦、2004（平成16）、「『日本靈異記』の史料的価値」小峯和明・篠川賢編、『日本靈異記
を読む』吉川弘文館